

## サモア語における魚の成長段階名称について\*

塩谷 亨

### Distinctive Fish Names for Stages of Growth in Samoan

Toru SHIONOYA

**要旨**：サモア語における魚の成長段階名称について、その区分の仕方と名称の形成法について分析した。区分の仕方としては、2段階区分が最も多いが最大で7段階もの細かい区分をする魚種もあること、複雑な段階区分がある場合には、幼魚段階と成魚段階の間の中段階の細分化に加えて、成魚段階よりも更に大きく成長した老魚についても細分化がなされる場合があることが指摘された。また、成長段階名の形成法としては、他の成長段階と無関係の独立名称を用いる場合、成魚名の全体または一部の音節が重複されたものを用いて主に若い成長段階の名称を形成する場合、特定の魚種に共通の要素と特定の成長段階に特有の要素とが結合された複合的名称を用いる場合の三種類あることを指摘した。また、今回の分析の結果と先行研究におけるハワイ語の魚の成長段階名称の分析の結果との比較対照も行った。

**キーワード**：サモア語 魚種名 出世魚 ハワイ語

#### 1. はじめに

北太平洋のハワイ、南太平洋西側に位置するニュージーランド、そして南太平洋の東の端にあるイースター島を結ぶ三角形に囲まれた広大な領域を占めるポリネシアは、文字通り四方を海に囲まれ、一部の島々には川も流れており、日本列島と同様、古くから魚とのつながりが密接な地域であった。その固有の言語であるポリネシア諸語においては、日本語同様、漁業や魚種関連の語彙が豊富に存在する。魚種関連語彙の豊富さを示す例として、日本語には、「出世魚」、すなわち、魚の成長段階に応じて名称が変わる成長段階名称を持つ魚種が多数存在する。同様に、ポリネシア諸語も、日本語をしのぐ程の、豊富な出世魚的な語彙システムを有する。尚、狭義の「出世魚」は成長段階により全く独立した名称を付与する場合（例：ハマチ<ブリ等）を指すが、本稿では、同じ語から派生した下位分類的名称が付与されている場合（例：シラスウナギ<ウナギ等）も含めるため、「出世魚」ではなく「成長段階名」という名称を用いる。塩谷（2017）では、ポリネシアの北端に位置するハワイ諸島の固有の言語であるハワイ語における魚の成長段階名のシステムを分析し、その特徴を明らかにするとともに、澁澤（1992）が日本語諸方言に見られる成長段階名称の分析に基づいて示した諸特徴との対照を行った。本稿では、ハワイ語と同系のポリネシア諸語に属するサモア語にお

ける魚の成長段階名のシステムについて扱う。サモア語はポリネシア西部にあるサモア諸島の固有の言語であり、同系統の言語であるハワイ語とは起源を同じくする語彙を多数共有している。

第2章では、サモア語では魚の成長段階をどのように区分しているか、及び、成長段階名はどのように形成されているか分析することを通して、サモア語における魚の成長段階名称システムの特徴を示す。第3章では、第2章で示したことについて、塩谷(2017)により示されたハワイ語の成長段階名称システムとの対照を行う。その際、第3.1節では、同系の言語であるサモア語とハワイ語で、成長段階名称のどの部分に同起源の語彙が見られるか比較する。また、第3.2節では塩谷(2017)で示されたハワイ語の成長段階名称システムの特徴と今回サモア語で見られた特徴との対照を行う。

サモア語の魚種名のデータとしては、サモアの魚種について、現地名、学名、体長等詳細なデータを網羅したアメリカ政府機関による調査報告である Waas(1984)を主たるソースとし、そのほかに、サモアの伝統文化の詳細な資料である Kramer(1995)の巻末の動物相(fauna)の中の魚種名一覧、サモア語の主要な辞書である Pratt(1911)と Milner(1966)を利用した。また、魚種名情報は Waas(1984)に基づくが、それにカラーイラストを添えた Goldin(2002)も参考情報として利用した。魚種を同定するためにはそれぞれの魚種の学名の表示が不可欠であるが、資料によっては同じ魚種でも異なる学名で記載されている場合が多数存在した。そこで、GBIF (Global Biodiversity Information Facility : OECD の勧告に基づき、世界の生物多様性情報を共有し、誰でも自由に閲覧できる仕組みをつくるために発足した地球規模生物多様性情報機構)のオンラインデータベースを参照して、学名を現在広く認められているものに統一した。また、和名が存在する場合には和名も記載するために、同じく GBIF のオンラインデータベースと、日本産魚類全種の現在の標準和名の最新の情報である木村(2020)と、補足データとして、日本魚類学会(1981)も用いた。

サモア語の魚種名を提示する際に、方言差がある場合には、それも明示する。サモア諸島は政治的に、東側のアメリカ領サモアと西側のサモア独立国に分かれており、両者の間に若干の方言差が見られる。また、アメリカ領サモアの中でも東側のマヌア諸島は独自の歴史と文化を持っており、魚種名についても特有の語彙が見られる。

## 2. サモア語における魚の成長段階名の区分の特徴

### 2.1. 成長段階名一覧

Waas(1984)に含まれていた成長段階名称を抽出し、それを基盤として、その上に他の三つの資料から得られた情報を追加していく形で、サモア語における魚の成長段階名の一覧を以下に示す。提示する順番は基本的に Waas(1984)に準じ、系統が近い魚ごとに表にまとめる。他の文献から補った情報を含む場合にはその都度それを略号で示す。Kramer(1995)、Pratt(1911)、Milner(1966)に基づく情報は、左端にそれぞれ、(K)、(P)、(M)のように表示する。特に明記がない場合には Waas(1984)のみに基づくものであることを意味する<sup>1</sup>。

表の左側には学名と、和名がわかるものについてはカッコ書きで和名を表示し、その右側

に成長段階名称を展開する。尚、資料によっては、個々の魚種名までは表示されず、科名（例：フグ科）、或いは属名（例：アジ科ギンガメアジ属）までしか表示されていない事例が相当数あった。その場合は、資料から得られた情報、すなわち、科名或いは属名までを学名と和名で表示する。また、類似した名称をまとめるために、必要に応じて、科名より大きなまとまりである目名に言及する場合（例：ダツ目ダツ科、ダツ目サヨリ科）もある。成長段階名称は、大きさにより異なる名称が指摘されている場合には、小さい段階から順に、小型、標準、大型のように示し、成熟度により異なる名称が指摘されている場合には、若い段階から順に、幼魚、中間、成魚のように示す<sup>2</sup>。資料によっては、一つの魚種について、大きさと成熟度という二種類の基準による段階名称が混在する場合もある。どの場合でも、表においては、最も若い段階或いは最も小さい段階を左端に示し、右に進むにしたがってより成熟した段階、あるいはサイズが大きい段階になるように並べる。同じ魚種の同じ成長段階において複数の名称が存在する場合には斜線 (/) で区切って並置し、方言差によるものである場合にはその名称が用いられている地域名をカッコで示す。

サメの仲間については、Waas(1984)には成長段階別名称の例は挙がっていない。今回、唯一、Kramer(1995)が、オオワニザメ科シロワニ属等のサメについて、大型のものを指す名称の存在に言及している。

表 1：サメ

学名（和名）	標準	大型
carcharias（オオワニザメ科シロワニ属）等	<sup>(K)</sup> tanifa	taulaolegalu

ウツボ科の魚一般に用いられる名称として、Waas(1984)が大きさにより異なる 4 段階の名称を報告している。

表 2：ウツボ

学名（和名）	小型←	標準	→大型	
muraenidae（ウツボ科）	to'e	pusi	maoa'e	atapanoa

このうち、maoa'e については Milner(1966)も特定の大ウツボが 3 フィート以上になった時の名称として挙げている。

カエルアンコウ科の魚について、Waas(1984)が小型（8 cm 未満）とそれより大きい大型を区別する 2 段階の異なる名称を報告している。

表 3：カエルアンコウ

学名（和名）	小型	大型
antennariidae（カエルアンコウ科）	la'otale	nofu

尚、この二つの名称は表 6 で示すフサカサゴ科の魚の名称と重なる部分がある。

ダツ目ダツ科の魚について、Waas(1984)は、大きさにより、40cm 未満の小型とそれより大きい大型を区別して 2 段階の異なる名称を報告している。Kramer(1995)は、ダツ目サヨリ科の名称として、最小サイズ、1 フィート位の小型、腕の長さほどの大型の 3 段階の名称を提示している他、ダツ科に属する別の 2 魚種として、それぞれ小型と大型の異なる名称と思われるものを示している。

表 4 : ダツ

学名 (和名)	小型↔大型		
belonidae (ダツ目ダツ科) /		ise	a'u
hemiramphus (サヨリ科ホシザヨリ属)	<sup>(K)</sup> iseise	ise	a'u
ダツ科 Belone 属?	<sup>(K)</sup> uivā		uisila
strongylura leiura (ダツ科タイワンダツ)?	<sup>(K)</sup> saosao		sapatū

しかしながら、下の 2 魚種については、本当にダツ目の魚種名かどうか疑問の余地がある。Kramer(1995)では uivā と uisila には完全な学名までは示されていないが、uisila はダツ科 Belone 属の魚として挙げられている。Milner(1966)も uisila は同じダツ目のサヨリ科ホシザヨリ属の一種としており、そうであればダツ目に属することになるが、Waas(1984)によれば uisila は別の魚種トウゴロウイワシ科 (学名 atherinidae) であるとしている。また、sapatū は Kramer(1995)ではダツ科タイワンダツとされているが<sup>3</sup>、Waas(1984)と Milner(1966)は sapatū はダツ科ではなくカマス科の魚バラクーダであるとされている。バラクーダはとがった口先と細長い形状および凶暴性においてダツと類似点があるので、魚種名の混同が生じている可能性もある。

イトウダイ科トガリエビスについて、Waas(1984)では、30 cm までの小型とそれより大きいものを区別して 2 段階の異なる名称を報告している。

表 5 : トガリエビス

学名 (和名)	小型	大型
sargocentron spinferum (イトウダイ科トガリエビス)	tāmalau	mu malau <sup>4</sup>

ちなみに、Milner(1966)では、tāmalau はイトウダイ科の魚で成長して長さが約 1 フィートになった場合の名称としており、長さとしては 30 cm と Waas(1984)における境界の 30cm とほぼ同じだが、それより大きい段階である mu malau の記載はない。

フサカサゴ科の魚について、Waas(1984)は小型 (8 cm 未満) とそれより大きい大型を区別する 2 段階の異なる名称を報告している。表 3 で見たカエルアンコウ科の魚の名称とほぼ同様であるが、大型を表す名称に別称が加わっている。

表 6：フサカサゴ

学名 (和名)	小型	大型
scorpaenidae (フサカサゴ科)	la'otale	nofu/ i'atala

Kramer(1995)は i'atala はおそらく若い nofu の名称であると、Waas(1984)とは矛盾する記述をしているが、おそらく (probably) という表現を用いていることもあり確実性は低いと考えられる。

ハタ科の魚について、Waas(1984)は、30cm 未満、30 から 90cm 型、さらにそれより大きいものを区別して、3 段階の異なる名称を報告している。Kramer(1995)もハタ科マハタ属の魚について、約 5 cm の小さいもの、10-15 cm 位までのもの、1 フィートほどのサイズ、さらに成長しきった最大サイズの 4 段階の区分を示している。さらに、Waas(1984)はハタ科に属する魚バラハタについて、幼魚、半成魚、成魚の成長段階による区別の名称を提示している。

表 7：ハタ

学名 (和名)	小型←→大型			
serranidae (ハタ科)	gatala		'ata'ata	vaolo
	小型←		標準	大型
epinephelus (マハタ属) 等	<sup>(K)</sup> gatalatala	gatala	'ata'ata	tonu
	幼魚	半成魚	成魚	
variola louti (ハタ科バラハタ)	papa tuauli	velo	papa	

バラハタの幼魚段階の名称が成魚段階の名称 papa に tuauli という要素が追加されて形成されている。この要素 tuauli は uli 「黒い」と tua 「背中」という意味に分析可能である。この魚種は成長につれて体の色が変わるため、それを反映した名称と考えられる。ちなみに、Milner(1966)でも gatala は約 6 インチ、'ata'ata は 1 フィート以上となっており、Waas(1984)の gatala と 'ata'ata の境界である 30 cm (=約 1 フィート)と一致するが vaolo という名称の記載はない。

アジ科の魚について、Waas(1984)は 8cm 以下、20cm 以下、50cm 以下、80cm 以下、80cm 以上の 5 段階の区分の名称を報告している。Milner(1966)も同じ名称で、アジ科ギンガメアジ属について 2-3 インチ、6 インチ、1 フィート、3 フィート、3 フィート以上の五つの区分を提示している。Kramer(1995)はアジ科の魚 (学名 caranx hippos) について、10cm、20cm、1 フィート、2 フィート、それより大きいもの最大 2m の 5 段階の区分の名称を挙げたうえで、もう一つの序列として、基準となる長さは示していないが、6 段階の名称を示している。また、Waas(1984)はアジ科メアジ属の魚について、10cm 未満、20cm 以内のサイズ、それ以上の 3 段階の区分の名称を報告しており、それと一部重複する名称として、Kramer(1995)はアジ科の魚マブタシマアジについて、手のひら大サイズ、より長い大型、1 フィート超の超大

型の計 3 段階の区分の名称を示している。

表 8 : アジ

学名 (和名)	小型←→大型				
carangidae (アジ科)	lupo	lupotā	malauli	ulua	sapoanae
caranx ギンガメアジ属	<sup>(M)</sup> lupo	lupotā	malauli	ulua	sapoanae
		小型←	標準	→大型	
caranx hippos	<sup>(K)</sup> lupo	lupotā		malauli	atugaloloa / ulua / sapoanae
	<sup>(K)</sup> lupo	lupotā	malautea	atugaloloa	malauli / ulua
		小型	標準	大型	
selar crumenophthalmus (アジ科メアジ)		nati	atule	taupapa	
			標準	→大型	
atule mate <sup>5</sup> (アジ科マブタシマアジ)			<sup>(K)</sup> atule	atulepapa	taupapa

学名が示されていないので魚種の確実な同定ができないが、Pratt(1911)にも、小さい方から順番に lupolupo/lupolago < lupo < lupota < malauli という区別と、malauli の成魚が ulua であるとの記述がある。

ヒイラギ科の魚について、Kramer(1995)は 15cm 以下の幼魚、15cm から 20cm の中間サイズ、1 フィートほどの成魚の 3 段階の区分の名称を示している。Milner(1966)も大小 2 段階の区分の名称を示している。

表 9 : ヒイラギ

学名 (和名)	小型・幼魚	中間	大型
equula (ヒイラギ科の魚)	<sup>(K)</sup> mūmū(?)	mūmūfatu	mū
	小型	大型	
	<sup>(M)</sup> mumu	lufi	

しかしながら、Kramer(1995)の記述にはあいまいな点がある。mūmū、mūmūfatu、mū の 3 つの名称を挙げた上で、mūmūfatu については明確に中間段階の名称と明示し、mū は完全に成長して 1 フィートほどと言及している一方で、幼魚段階については最も小さいサイズの 15cm 以下であると述べただけで mūmū がその段階を示す名称であるとは明言していない。サモア語の傾向として、反復形は小さいものや若いものを示す傾向があることから、残る mūmū が 15cm 以下の幼魚段階を表す名称と推測される。

フェフキダイ科の魚について、Waas(1984)は 15cm 以下、15cm から 30cm、30cm 以上の大型と 3 段階の区分の名称を示している。フェフキダイ属の魚について、Milner(1966)も 2 フィ

ートほどの最大級サイズと、それより小さい1フィートほどの段階の2つの区分を示している。同じく、Pratt(1911)も幼魚段階と成魚段階の2段階の名称をあげている。また、フエフキダイ科の魚ヤエヤマフエフキについて、Kramer(1995)が5-10cm、10-20cm、1フィート、1-2フィート、最大サイズの1mの計5段階の区分の名称を示している。さらに、Waas(1984)はフエフキダイ科の魚ヨコシマクロダイについて、15cm以下の小型、15cm以上の大型の2段階の名称を報告している。

表 10：フエフキダイ

学名 (和名)	小型←→大型				
lethrinidae (フエフキダイ科の魚)	mata'ele'ele		ulamalosa		filoa
lethrinus (フエフキダイ属の魚)	<sup>(M)</sup> mata'ele'ele				filoa
	幼魚				成魚
	<sup>(P)</sup> tanutanu / apa'apa / mata'ele'ele				filoa
lethurinus reticulatus (ヤエヤマフエフキ)	小型←				標準
	<sup>(K)</sup> lafa	lafalafa	mata'ele'ele	gutuloloa	filoa
monotaxis grandoculis (ヨコシマクロダイ)	小型		大型		
	matāmu		matamatāmu		

ヒメジ科の魚について、Waas(1984)は8cm以下の小型と大型の2段階の区別を報告している。Milner(1966)にも同様の記述がある。その二つに加えて、Kramer(1995)はアカヒメジについて、サモアの中でもマヌア諸島ではもう一つpo'ofulaという中間段階の名称が存在すると示している。更にKramer(1995)はミナミヒメジについて成魚と幼魚の2段階の名称を示している。

表 11：ヒメジ

学名 (和名)	小型←→大型		
mulloidichthys <sup>6</sup> (ヒメジ科アカヒメジ属)	i'asina		vete
	小型	中間	標準
mulloidichthys vanicolensis (アカヒメジ)	<sup>(K)</sup> i'asina/aolama	po'ofula(マヌア)	
	幼魚		成魚
upeneus vittatus (ヒメジ属ミナミヒメジ)	<sup>(K)</sup> tugane	ulaoa	

マンジュウダイ科の魚について、Waas(1984)は10cm以下と10cm以上の2段階の区別の名称を報告している。

表 12：マンジュウダイ

学名（和名）	小型	大型
ephippididae（マンジュウダイ科）	pe‘ape‘a	pe‘ape‘a uli

ここで大型の名称に付加されている uli は「黒い」という意味であるため、大きさではなくむしろ色の違いを表しているという可能性もある。

キンチャクダイ科の魚タテジマキンチャクダイについて、Waas(1984)は幼魚と成魚の 2 段階の区別があり、幼魚名称については方言差があると報告している。

表 13：キンチャクダイ

学名（和名）	幼魚	成魚
pomacanthus imperator（タテジマキンチャクダイ）	tu‘u‘u vaolo（米領サモア）/ tu‘u‘u nuanua（サモア独立国）	tu‘u‘u moana

ここで三つの名称の共通要素である tu‘u‘u はキンチャクダイ科の魚を表す一般名称である。その後ろに付加されている修飾成分のうち、nuanua「虹」は体色を表している可能性がある。また、moana「深海/遠洋」は活動地域を表している可能性がある。

ボラ科の魚について、Waas(1984)は最も小さい 5cm 以下の小型サイズ、5-8cm、8-12cm、12-15cm、15-20cm、20-40cm の大型、40cm 超えの超大型まで合計 7 段階の区別の名称を報告している。Kramer(1995)も最も小さい小型から、5-8cm、10-15cm、20-30cm、最大サイズの計 5 段階の区別の名称を示している。ボラ科の魚オニボラについて Waas(1984)は 10cm 未満の小型、10-25cm の大型、25cm 超の超大型の計 3 段階の区別の名称を示している。また、Kramer(1995)はボラ科の別の魚であるコボラについて、大きさによる 2 段階の区分の名称を示している。

表 14：ボラ

学名（和名）	小型←					標準	大型
mugilidae（ボラ科）	moi	poi	āua	fuafua	popoto / mamase	‘anae	afomatua
	<sup>(K)</sup> poipoi		lauana	aua	matapoga	anae	
	小型←→大型						
ellochelon vaigiensis <sup>7</sup> （オニボラ）	fuitogo			‘afa		‘anaeafa	
	小型			標準			
planiliza macrolepis <sup>8</sup> （コボラ）	<sup>(K)</sup> unalii			‘afa			

Kramer(1995)はこの他 aua の若い段階として folu という名称を挙げているが、folu が aua から poipoi までのどこに位置するのかわかりません。Pratt(1911)も anae の若い段階として aua



と fuafua を挙げているが、順番については言及していない。

ベラ科オビテンスモドキについて、Waas(1984)は幼魚と成魚の2段階の区別の名称を報告している。ベラ科モチノウオ属メガネモチノウオについて、Waas(1984)は35cm以下、35-75cmの大型、75cm超の超大型の3段階の名称を、Kramer(1995)はアカテンモチノウオについて、指サイズの小型、標準サイズ、更に大きいサイズの3つ、Milner(1966)も2-3インチの小型、6インチ或いは1フィートのサイズ、3フィートの大型の3つを提示している。

表 15 : ベラ

学名 (和名)	幼魚	成魚	
novaclichthys taeniourus (ベラ科オビテンスモドキ)	sugale la'o	sugale tāili	
	小型←→大型		
cheilinus undulatus (ベラ科メガネモチノウオ)	lalafi	tagafa	malakea
	小型	標準	大型
cheilinus chlorourus (アカテンモチノウオ)	<sup>(K)</sup> siumuti	lalafi	tanafa
	小型←→大型		
cheilinus (ベラ科モチノウオ属の魚)	<sup>(M)</sup> siumuti	lalafi	tagafa/tanafa

ベラ科の魚は、メスの一部が成長するとオスに性転換する魚である。メスが成長して性転換した段階 (terminal phase「最終段階」) とその前の段階 (initial phase「初期段階」) では体色や模様が大きく異なる場合もあり、区別した名称が用いられる場合がある。Waas(1984)はベラ科のリュウグウベラとキヌベラについて、初期段階と最終段階の2つの区別を示している。

表 16 : ベラ (初期段階と最終段階で異なる名称を持つもの)

学名 (和名)	初期段階	最終段階
thalasoma fuscum (ベラ科リュウグウベラ)	uloulo gatala	pata'ota'o
thalasoma purpureum (ベラ科キヌベラ)	uloulo gatala	patagaloa

ツバメコノシロ科の魚について、Waas(1984)は米領サモアでは15cm以下の小型とより大きい大型の2段階を区別するが、サモア独立国では大きさによる区別がないと報告している。

表 17 : ツバメコノシロ

学名 (和名)	小型	大型
polynemidae (ツバメコノシロ科)	'umi'umia	i'ausi (米領サモア)
	'umi'umia (サモア独立国)	

ブダイ科の魚について、Waas(1984)は 20cm 位までの小型、20-50cm の大型、50cm 超の超大型の 3 段階の名称を報告している。Milner(1966)はブダイ科アオブダイ属の魚について、6 インチ程、1 フィート程、1.5-2 フィート程、2 フィート程、更に 3 フィート程の超大型、の計 5 段階の名称を示している。Kramer(1995)はアオブダイ属の魚について、3-5cm、5-10cm、2 フィート程、2-3 フィート程の 2 段階の計 4 段階の名称を示している他、アオブダイ属オウムブダイについて幼魚と成魚の 2 段階の名称を示している。

表 18 : ブダイ

学名 (和名)	小型←→大型				
scaridae (ブダイ科)		fuga	laea	galo	
	小型	標準	→大型		
scarus (アオブダイ属)	<sup>(M)</sup> ulapo/usiusi	fuga	mamanu	laea	galo
scarus guacamaia <sup>9</sup>	<sup>(K)</sup> fugafuga	fuga	mamanu	lāea	
	幼魚	成魚			
scarus psittacus <sup>10</sup> (オウムブダイ)	<sup>(K)</sup> usiusi	fugausi			

Pratt(1911)においても、fuga や usiusi に関連した名称が記載されているが学名も英語名も明示されておらず、実際にどの魚種を指すのか不明確であるが、断片的な情報を統合すると、若い順から、fugafuga<fuga<ulapo、usiusi<laea<galo のような成長段階となっているように思われる。ブダイ科の魚は、色や形状等のバリエーションが豊かであり、種類が非常に豊富である。様々な種類のブダイについてその成長段階を表すために、上記の成長段階名称に様々な修飾語句が付加されて、様々な種類のブダイの成長段階を表す。例えば、ブチブダイ (学名 scarus niger) については、上表の、標準サイズの名称 fuga と大型段階の名称 laea に、ブチブダイという魚種を特定する要素 pala を組み合わせて、fuga pala 「標準サイズのブチブダイ」、laea pala 「大型サイズのブチブダイ」のように、それぞれの成長段階のブチブダイを表す。

ハゼ科の魚について、Kramer(1995)はウロハゼ属の魚フタゴハゼにそれぞれ、稚魚と成魚の区別の名称を報告している。また、Kramer(1995)はカワアナゴ属の魚について、幼魚段階と成魚段階の区別の名称を報告している。Milner(1966)もカワアナゴ属の魚テンジクカワアナゴに、幼魚段階と成魚段階の区別の名称を示している。

表 19 : ハゼ

学名 (和名)	稚魚	成魚
glossogobius giuris <sup>11</sup> (ハゼ科ウロハゼ属フタゴハゼ)	<sup>(K)</sup> popoga	pa'ofu
	幼魚	成魚
eleotris (ハゼ科カワアナゴ属)	<sup>(K)</sup> igaga	apofu
eleotris fusca (テンジクカワアナゴ)	<sup>(M)</sup> igaga	apofu/pa'ofu

ユゴイ科の魚について、Kramer(1995)は大きさによる2段階の区別の名称を示している。

表 20 : ユゴイ

学名 (和名)	標準	大型
kuhlia malo <sup>12</sup> (ユゴイ科の魚)	<sup>(K)</sup> sesele	inato

ニザダイ科クロハギ属の魚について、Waas(1984)は大きさによる2段階の区分を、Milner(1966)は2-3インチ程の小型、6インチ程、1フィート程の大型の三段階の区分の名称を示している。更に、Milner(1966)はニザダイ科クロハギ属及びサザナミハギ属の幼魚について、大きさによる3段階の名称を示している。それらを合わせると、幼魚段階から大型まで合計6段階の名称が存在することになるが、実際、Kramer(1995)もクロハギ属の魚ニジハギについて、最小段階、その次に小さい段階、3cm程、5cm程、10cm程、15-30cm程、さらに大きい大型サイズと、全部で7段階の名称を示している。また、Waas(1984)は、サザナミハギ属のサザナミハギについて、幼魚と成魚の二段階の名称を示している。もう一つ、別系列と思われる成長段階名称として、Kramer(1995)がクロハギ属の魚(学名 *acanthurus tennentii* 和名不詳)について、小型、標準、そして、2フィート程の大型の3段階の名称を示しているが、それと全く同じ語彙を、Milner(1966)が魚種は特定せず、クロハギ属の魚の名称として示している。ただし、Milner(1966)では大型は2フィートではなく1フィート程とされている。

表 21 : ニザダイ (その1)

学名 (和名)	小型					標準	大型
acanthurus (クロハギ属)						pone	palagi
	<sup>(M)</sup> ponepone					pone	palagi
acanthurus/ctenochaetus (クロハギ属/サザナミハギ属)の幼魚	<sup>(M)</sup> maomao					logouli	pala'ia
	小型←					標準	大型
a. lineatus (ニジハギ)	<sup>(K)</sup> maomao	logouli	palaia	ponepone	poneponefatu	pone	palagi
	幼魚					成魚	
c. striatus (サザナミハギ)	logoulia/palai'a					pone	
	小型		標準			大型	
a. tennentii	<sup>(K)</sup> i'usina		māmāpalagi			palagi	
acanthurus (クロハギ属)	<sup>(M)</sup> i'usina		māmāpalagi			palagi	

ニザダイ科クロハギ属のシマハギについて、Kramer(1995)が最も小さい小型、10-15cm程、1フィート程の大型、2フィート程の超大型の4段階の名称を示している。また、ニザダイ科

テングハギ属について、Waas(1984)は大きさによる2段階の名称を、Milner(1966)は2-3インチ程の小型、6インチ程、1フィート程の3段階の名称を示している。また、Waas(1984)がテングハギ属ミヤコテングハギについて、15cm以下の小型と15cm以上の大型の2つの段階名称を示している。

表 22 : ニザダイ (その2)

学名 (和名)	小型	標準	→大型	
acanthurus triostegus (クロハギ属シマハギ)	<sup>(K)</sup> manininini	manini	maninifatu	maninisaupata
	小型		標準	
naso (テングハギ属)	'ili'ilia/ umelei		ume	
	小型←		標準	
	<sup>(M)</sup> 'ili'ilia	umelei	ume	
	小型	大型		
naso lituratus (テングハギ属ミヤコテングハギ)	'ili'ilia	umelei		

アイゴ科の魚について、Kramer(1995)は4段階の成長段階の名称を示している。Milner(1966)とPratt(1911)にも anefe は lō の小型、若魚との記述がある。Waas(1984)はアイゴ科のハナアイゴに5cm以下の小型、5-10cmの大型、10cm超の超大型の3段階、アミアイゴには5cm以下の小型、5cm超の大型の2段階の大きさの区別を表す名称を報告している。

表 23 : アイゴ

学名 (和名)	小型←→大型			
siganus <sup>13</sup> (アイゴ科の魚)	<sup>(K)</sup> anefe	lō	pa'uulu	tito
	<sup>(M)</sup> anefe	lō		
	幼魚	成魚		
	<sup>(P)</sup> anefe	lo		
	小型←→大型			
siganus argenteus (ハナアイゴ)	lōloa		'ofe'ofe	mālava
siganus spinus (アミアイゴ)	anefe		pa'uulu	

サバ科の魚カツオについて、Waas(1984)は40cm位までのサイズ、40-50cmの大型、50cm超の大型の3つの段階の区別の名称を示している。Milner(1966)は、1フィート程の小型、標準サイズ、3フィート超の大型の3段階の名称を示している。同じカツオについて、Kramer(1995)は幼魚、中間段階、成魚段階の3つの成長段階の区分の名称を示している。

表 24 : カツオ

学名 (和名)	小型	標準	→大型	
katsuwonus pelamis <sup>14</sup> (サバ科カツオ)		atu	faolua	ga'ogo
	<sup>(M)</sup> tavatava	atu	gā'ogo	
	幼魚	中間	成魚	
	<sup>(K)</sup> atuleau	tavalau	atu	

サバ科マグロ属のキハダとメバチについて、Waas(1984)は、18kg 未満の小型と、18kg 超の大型の 2 つの段階の区別の名称を示し、大型の名称には方言差があることを報告している。

表 25 : マグロ

学名 (和名)	小型	大型
thunnus albacares/ thunnus obesus (サバ科マグロ属キハダ/メバチ)	asiasi	to'uo (米領サモア) / ta'uo (サモア独立国)

モンガラカワハギ科の 3 つの魚種について、Waas(1984)は 20cm 未満と 20cm 超の 2 段階の名称を報告している。

表 26 : モンガラカワハギ

学名 (和名)	標準	大型
balstoides virdescens/ pseudobalistes flavimarginatus / pseudobalistes fiscus (モンガラカワハギ科ゴマモンガラ/キヘリモンガラ/イソモンガラ)	sumu laulau	umu

フグ科の魚について、Kramer(1995)は大きさによる 2 段階の名称を示している。

表 27 : フグ

学名 (和名)	小型	標準
tetrodon <sup>15</sup> (フグ科?)	<sup>(K)</sup> moemimi	sue

ハコフグ科の魚について、Kramer(1995)は初期段階と最終段階の 2 つの成長段階の区別の名称を示している。

表 28 : ハコフグ

学名 (和名)	初期段階	最終段階
ostracion meleagris (ハコフグ科クロハコフグ)	<sup>(K)</sup> moamoa uli	moamoa sama

ここで共通の要素 moamoa に付加されている uli は黒色、sama にも黄色を表す意味がある。ハコフグは成長により体色が変わる魚であるため、これらの名称は成長段階というよりも、直接的には体色の違いの区別を反映した名称である可能性もある。

## 2.2. 成長段階名称の区分と形成法

前節の一覧から、サモア語における魚の成長段階名の区分の仕方について以下のような特徴が指摘される。

- (1) シンプルな 2 段階が最も多かったが、最大で 7 段階もの複雑な事例が見られた。今回の分析で扱った魚種が属する 26 の科の中で、2 段階の名称が存在したのが 13 の科と半数を占めており、次いで 3 段階の名称が存在したのが 6 つの科であった。5 段階以上の複雑な区分としては、5 段階が 2 つ（フエフキダイ科とブダイ科）で、6 段階が 1 つ（アジ科）、最も複雑な 7 段階の区分が見られたのは 2 つ（ボラ科とニザダイ科）であった。
- (2) 5 段階以上の複雑な区分が見られる場合には、最も若い・最も小さい段階と成魚・標準サイズ段階の間の中間段階に細かい区分が見られる傾向があった。最大 5 段階以上の複雑な区分がみられた 5 つの科のうち、ブダイ科を除く 4 つの科（フエフキダイ科、アジ科、ボラ科、ニザダイ科）において、最も若い・最も小さい幼魚段階と成魚・標準サイズ段階の間に 2 つ以上の段階が見られた。
- (3) その一方で、成魚・標準サイズ段階よりも大きい段階の名称が、ウツボ、ハタ、アジ、ボラ、ベラ、ブダイ、ニザダイ、カツオ、モンガラカワハギの 9 つの科で見られ、その内、ウツボ、アジ、ブダイ、ニザダイ、カツオの 5 つの科においては、成魚・標準サイズ段階よりも大きなサイズの段階の名称が 2 つ以上見られた。

成長段階名の形成法としては、以下の 3 通りの場合が見られた。

- (4) 他の成長段階の名称と形式的に全く異なる独立した名称で同じ魚種の別の成長段階を示す場合。例：ハゼ科の幼魚の名称 igaga と成魚の名称 apofu
- (5) 他の成長段階の名称と全体または一部の音節を反復した形で同じ魚種の別の成長段階を示す場合。例：ニザダイ科クロハギ属の成魚 pone とそれより若い段階の名称 ponepone
- (6) 同じ魚種の異なる成長段階を表す名称の間に、形式的に共通要素が含まれる場合。  
例：シマハギの標準段階 manini と大型段階の maninifatu（manini という要素が共通）

圧倒的多数で見られたのは(4)、すなわち、狭義の出世魚のように他の成長段階と形式的に全く異なる独立名称を用いる方法であった。

反復形を用いる (5) については、ザダイ科クロハギ属の成魚 pone とそれより若い段階を表す ponepone のように、単語全体を反復する事例がサヨリ (ise-iseise)、ヒイラギ(mū-mūmū)、ブダイ (fuga-fuga-fuga)、ニザダイ(pone-ponepone)の 4 つの科で見られた。また、ハタ科の標

準段階の *gatala* とその小型段階の *gatatala* のように一部の音節を反復する方法が、ハタ (*gata-gatatala*)、フエフキダイ (ヨコシマクロダイ) (*matāmu-matamatāmu*) の 2 つの科で見られた。反復形を用いる事例のうち、ヨコシマクロダイの事例以外では全てより小さい・若い段階を表す名称に反復形が用いられている。

また、同じ魚種の異なる成長段階を表す名称の間に形式的に共通要素が含まれる (6) の事例としては、<共通要素+成長段階特有の要素> という構造を持つものと <成長段階特有の要素+共通要素> という構造をもつものに細分される。サモア語では <名詞+修飾語> が基本的な構造であるため、それぞれ二つ目の要素が一つ目の要素を修飾していると分析される。<共通要素+成長段階特有の要素> という構造を持つ事例が圧倒的に多く、該当するのは (以下共通要素を太字で表示する)、バラハタ (*papa tuauli · **papa***)、アジ (*lupo · lupotā, atule · atulepapa*)、ヒイラギ (*mūmū · mūmūfatu*)、マンジュウダイ (*pe'ape'a · pe'ape'a uli*)、キンチャクダイ (*tu'u'u vaolo/nuanua · tu'u'u moana*)、オニボラ (*'afa · 'anaeafa*)、オビテンスモドキ (*sugale la'o · sugale tā'ili*)、ニザダイ (*manini · maninifatu · maninisaupata*)、カツオ (*atuleau · atu*)、ハコフグ (*moamoa uli · moamoa sama*) の 11 魚種で見られた。また、<成長段階特有の要素+共通要素> という構造をもつ事例としては、トガリエビス (*tāmalau · mu malau*)、ニザダイ (*mamāpalagi · palagi*) の 2 魚種でみられた。尚、やや複雑な事例であるが、ブダイ (*usiusi · fugausi*) については *usi* が共通要素となっていると考えると後者の分類に含めることができる。ほとんどの場合、各要素の意味・語源を分析することは困難であるが、*usi* 「青・緑」、*uli* 「黒」(*tuauli* 「黒い背中」も含む)、*sama* 「ウコン (黄)」は魚の体色を表していると思われる。また、*fatu* (一般的な意味は「心臓」という要素が 2 か所で現れており、いずれもより大きい段階を指していることから、大きさに関係する意味が想定される可能性がある。

### 3. ハワイ語における魚の成長段階名との対照

#### 3.1. 魚の成長段階名においてサモア語とハワイ語で起源を同じくする名称が見られる個所

サモア語とハワイ語はポリネシア諸語に属する同系の言語であり、魚種名についても、同系の単語が多数存在する。ここでは、今回得られたサモア語の魚の成長段階名に含まれる名称について、ハワイ語で対応する名称と同系と考えられるものがどのくらいあるか示す。その際、同系かどうかの判断資料としては、ポリネシア諸語のオンライン比較辞典である POLLEX-Online を参照した<sup>16</sup>。尚、以下で言及するハワイ語の成長段階名称の情報は塩谷 (2017) に基づく。

ウツボ科の成長段階名称において、サモア語における標準段階の *pusi* はハワイ語におけるウツボの成魚段階を表す *puhi* と対応する。ハワイ語の *puhi* も成長段階により名称が変わるが、そのほかの段階を指す名称についてはハワイ語で対応するものはない<sup>17</sup>。

サヨリ科の成長段階名称において、より小さい小型段階を表す *iseise* はハワイ語のサヨリ科の魚を指す名称 *iheihe* に対応するが、ハワイ語ではサヨリ科の魚については成長段階別の名称はない。また、サモア語でダツ科及びサヨリ科の大型段階を指す *a'u* はハワイ語の *a'u*

に対応するが、ハワイ語の a'u は、ダツではなくカジキを指す。ダツもカジキも尖った先端を持つ危険な魚という点で類似しているため、魚種の混同があった可能性がある。

フサカサゴ科の大型段階を指す *nofu* はハワイ語の *nohu* と対応する。しかしながら、ハワイ語の *nofu* はフサカサゴ科を一般的に指す名称であり、成長段階別の名称はない。

アジ科の大型段階を指すサモア語の *ulua* は、同じくアジ科の成魚段階を指すハワイ語の *ulua* に対応する。しかしながら、そのほかの段階の名称では対応するものはない<sup>18</sup>。

メアジの標準段階を指すサモア語の *atule* はハワイ語の *akule* に対応する。ハワイ語の *akule* も成長段階により名称が変わるが、そのほかの段階の名称では対応するものはない<sup>19</sup>。

ヨコシマクロダイを指すサモア語は小型段階が *matāmu*、大型段階が *matamatāmu* であるが、これらの単語を構成する要素 *mu* はハワイ語でヨコシマクロダイを指す *mū* に対応する。しかしながら、ハワイ語の *mū* については、成長段階の区別により名称が変わることはない。

ヒメジ科の成魚段階を指すサモア語の *vete* はハワイ語でヒメジ科の成魚段階を指す *weke* に対応する。ちなみに、ハワイ語で *weke* の幼魚段階の名称は 'oama で、サモア語で小型段階のヒメジを指す名称は *aolama* である。母音も変わっており、ハワイ語の形には反映していない子音の *l* もあるため、規則的な対応とは言えないが、POLLUX online によれば、この二つの形は対応するとされている。

ボラ科の大型もしくは成魚段階を指すサモア語の 'anae はハワイ語でボラ科の成魚段階を指す 'anae と対応している。しかしながら、他の成長段階を指す名称で対応するものはない<sup>20</sup>。POLLUX online はオニボラの大型段階を指す 'afa がハワイ語でダツ科の成魚を指す 'aha と対応するとしているが、ボラとダツでは種類が全く異なるので同じ魚種を指すとは言い難い。もしこれらが同系の単語であるとすれば、指す魚種が変わってしまった可能性がある。

ハゼ科の幼魚を表すサモア語の *igaga* はハワイ語でハゼ科の幼魚を表す *hinana* とほぼ対応している。しかしながら、成魚段階の名称は対応していない<sup>21</sup>。

ニザダイ科クロハギ属の大型段階を指すサモア語の *palagi* はハワイ語でクロハギ属の一種であるニセカンランハギ (学名 *acanthurus dussumieri*) を指す *palani* と対応するが、ハワイ語の *palani* には成長段階による名称の変化はない。

ニザダイ科シマハギの標準段階を指すサモア語の *manini* はハワイ語ではシマハギの成魚を指す *manini* と対応する。しかしながら、他の成長段階名称で対応するものはない<sup>22</sup>。

ニザダイ科ミヤコテングハギの大型段階を指す名称は *umelei* である。ハワイ語で同種を指す一般名称は *umaumalei* である。母音が異なっており、POLLUX online では対応している事例とはなっていないが、指す魚種が一致していて、形式も類似していることから、同起源の単語である可能性もある。しかしながら、ハワイ語の *umelei* については成長段階による名称の区別はない。

サバ科の魚カツオの標準段階を指すサモア語の *atu* はハワイ語ではカツオの成魚段階を指す *aku* と対応する。他の成長段階を指すサモア語の名称のうち、カツオの小型段階を指す *tavatava* はハワイ語ではカツオと見かけもよく似た種であるサバ科スマ属の成魚段階を指す *kawakawa* と対応している。しかしながら、サモア語の *tavatava* は小型段階を指すのに対して、



ハワイ語の *kawakawa* は成魚段階を指すため、両者は異なる成長段階を指していることになる。近い種の成長段階名称の間で混同が生じた可能性がある。

サバ科の魚マグロの小型段階を指すサモア語の *asiasi* はハワイ語でマグロの成魚段階を指す *ahi* (ハワイ語では非反復形で用いられる) と対応する。2.2 節で述べたように、反復形はより小さい・若い段階を指す傾向がある。従って、ここでも、サモア語では反復形である *asiasi* がマグロの小型段階を指し、一方、ハワイ語では非反復形である *ahi* が成魚段階を指すことは自然といえる。しかしながら、サモア語には反復形の *asiasi* があるのに非反復形の *asi* がなく、成魚段階にはそれとは別の名称が使われている。何らかの理由で元々成魚段階を指す名称であった非反復形の *asi* が別の単語と入れ替わってしまった可能性がある。

モンガラカワハギの標準段階を指すサモア語の *sumu laulau* に含まれている *sumu* はこの科の魚を指す一般名称であるが、ハワイ語でモンガラカワハギ科の魚を指す一般名称である *humu* (実際には反復形 *humuhumu* で用いられる) と対応する。しかしながら、ハワイ語においては、モンガラカワハギ科では、成長段階により名称が変わるものはない。

フグ科の成魚段階を指すサモア語の *sue* はハワイ語でフグ科の魚を指す一般名称である 'o'opu hue の二つ目の要素である hue に対応する。しかしながら、ハワイ語においてフグ科で成長段階による名称の変化はない。

ハコフグ科の初期段階及び最終段階において用いられる *moamoa* はハコフグ科の魚を指す一般名称であるが、ハワイ語でハコフグ科の魚を指す一般名称である *moa* (非反復形である) と対応する。しかしながら、ハワイ語において、ハコフグ科で成長段階による名称の変化はない。

このように、魚の成長段階名称の一覧を比較すると、サモア語とハワイ語では、対応する同系のものが相当数存在する。しかしながら、ほとんどの場合、対応するのは、複数ある成長段階名称のうち的一段階にとどまる。上述の事例のうち、複数の成長段階についてサモア語とハワイ語で対応が見られたのはヒメジ科の事例 (サモア語: 小型 *aolama*・大型 *vete* ⇔ ハワイ語: 幼魚 *oama*・成魚 *weke*)、カツオの事例 (サモア語: 小型 *tavatava*・標準段階 *atu* ⇔ ハワイ語: サバ科スマ属の成魚 *kawakawa*・カツオの成魚 *aku*) であるが、前者は音の対応が不規則 (通常はサモア語 *aolama* に対応するハワイ語の形は同じく *aolama* が予期される) であり、後者は音はきれいに対応するが成長段階が対応していない (サモア語の *tavatava* は小型段階だが、ハワイ語の *kawakawa* は成魚段階で、ハワイ語でカツオの小さい段階を指す名称は *kīna'u* / *'āhua* である) という点で、いずれの場合も対応として問題がある。

### 3.2. ハワイ語の成長段階名称システムの特徴とサモア語で見られた特徴

まず、異なる名称で区別される成長段階の数について比較する。塩谷(2017)によると、ハワイ語においては、シンプルな2段階が最も多く、段階数が増えるにつれて事例数は減少し、最大で5段階の区別をする魚種があることが示された。一方、今回分析したサモア語でも、シンプルな2段階の区別をするものが最も多く、次いで3段階の区別をするものが多く、4段階以上の区別を持つものはそれぞれ一つか多くても二つの魚種しかなく、最大で7段階の

区別をするものがあつた。両言語とも成長段階名称の区別としては2段階（小型と大型または幼魚と成魚）が主流であることは共通であるが、ハワイ語で見られた成長段階区分が最大で5段階であるのに対して、サモア語では6段階の区別を持つ魚種が一つ、7段階の区別を持つ魚種が二つもあることから、サモア語のほうがより複雑であると言える。

次に、成長段階を細かく区分する場合、より小さい・若い段階と、より大きい・年長いた段階のどちら側においてより細分化されているか比較する。塩谷(2017)のデータを再分析すると、ハワイ語で多段階の複雑な成長段階区分名称を示す事例では、幼魚段階と成魚段階の間の中間段階に細かい区分を設けているが、成魚段階より大きい超大型段階の区分を持つものは2魚種に留まっている<sup>23</sup>。一方で、サモア語においても、幼魚段階と成魚段階の間の中間段階に細かい区分を設けている事例が多数見られるのはハワイ語と同様であるが、標準段階或いは成魚段階よりも更に大きい段階の名称を持つ魚種はハワイ語よりもずっと多く、9つの科で見られた。わかりやすい例を挙げると、アジ科において、ハワイ語では *ulua* が成魚でありそれより大きな段階を指す名称がないのに対して、サモア語では成魚段階の *ulua* よりさらに大きな段階の名称として *sapoanae* がある。また、ボラにおいても、ハワイ語では成魚段階の *'anae* よりも大きな段階を指す名称は存在しないが、サモア語では成魚段階の *'anae* よりも更に大きな段階の名称として *afomatua* が存在する。このように、標準段階・成魚段階よりも更に大型の段階についての細分化の点でも、サモア語の方がより複雑であるといえる。

#### 4. 結び

四方を海に囲まれ古くから魚と密接な関係を持っていたサモア語は、たいへん複雑で豊富な魚の成長段階名称区分のシステムを持っていることが示された。区分される段階の数と成魚段階よりも更に大きく成長した段階についての細分化において、サモア語はハワイ語よりもより複雑な様相を呈していることも示された。

サモア語とハワイ語は同系の言語であり、語源を同じくする同系の語彙を多く共有しており、同じ魚種について対応する同系の名称を持つ事例がとても多い。しかしながら、サモア語とハワイ語の成長段階名称の対応を見ると、両言語で同系とみられる名称がある場合でも、ほとんどの場合は一つの成長段階に限られ、二つ以上の成長段階で同系のものが見られることはほとんどない。一方で、どの魚種において細かく細分化した複雑な成長段階名称を持つのかについては、サモア語とハワイ語でよく似ている。例えば、両言語共に、特にボラ科とアジ科において極めて複雑な段階名称を持っている点で類似しているが、それぞれの成魚段階を指す名称を比較すると、アジ科ではサモア語でもハワイ語でも同じ形 *ulua*、ボラ科でも両言語で同じ形 *'anae* が対応しており同系であるものの、他の段階名称は対応していない。これは、一つの魚種を代表する名称は継承されやすく同系言語で共有されやすいが、それ以外の細分化された成長段階名称は継承されにくい、或いは、個々の言語で独自に発達しやすいということを示している可能性がある。

今回はポリネシア諸語の中でもサモア語とハワイ語という距離が離れた言語を比較したが、次の課題としては、距離的に両言語の間にあるタヒチ語について、同様に魚の発達段階名

称の分析を行い、サモア語、タヒチ語、ハワイ語の間で、魚の成長段階名称としてどの要素が共有されているか明らかにしたい。

#### 注

- <sup>1</sup> サモア語の表記には母音字として a、e、i、o、u の 5 文字、子音字として f、g、l、m、n、p、s、v (ただし g は鼻母音 [ŋ] を表す) と声門閉鎖音を表す記号 ‘ の 9 文字が用いられる。また、長母音はそれぞれ、ā、ē、ī、ō、ū のようにマクロンを付加して表す。しかしながら、文献によって、声門閉鎖音を表す記号 ‘ と長母音を表すマクロンの表記は徹底されていない。今回用いた文献のうち、Pratt(1911)は声門閉鎖音を表す記号 ‘ と長母音を表すマクロンのいずれも表記していない。Kramer(1995)と Waas(1984)と Milner(1966)は声門閉鎖音を表す記号 ‘ と長母音を表すマクロンを基本的に表記しているが、中でも、Milner(1966)が極めて厳密に表記しており、Milner(1966)では声門閉鎖音を表す記号 ‘ 或いは長母音を表すマクロンで表記されているのに、他の文献でそれに対応する魚種名では声門閉鎖音を表す記号 ‘ 或いは長母音を表すマクロンが表示されていないという事例も存在する。本稿では、表記の違いに関わらず、各文献の表記をそのまま示すこととした。
- <sup>2</sup> 大きさにより異なる名称が用いられている場合とは、同じ魚種の異なる名称が用いられる区分が、「小さい(small/little)」や「大きい(large/long)」及びそれらの比較級・最上級のように大小や長短(中間の大きさを示す medium、最大級のサイズになったことを示す full-grown も含む)を表す形容詞で表されている場合(例: *gatala*, the little ‘ata‘ata 「gatala とは小さい ‘ata‘ata のことである。」)、または、〇〇cm や 〇フィート等、長さや大きさを表す数値で表示されている場合(例: ...called *fugafuga* when 3-5 cm, *fuga* when 5-10 cm 「3-5cm の時は *fugafuga*、5-10cm の時は *fuga* と呼ばれる。」)である。また、異なる大きさの段階を示す複数の名称の中で標準的な(すなわち無標の)名称が示されている場合には表中では「標準」と示した。標準的な(すなわち無標の)名称が示されている場合とは、ある段階の名称が大小の判断の基準点となっている場合(例: *gatala*, the little ‘ata‘ata 「gatala とは小さい ‘ata‘ata のことである。」では ‘ata‘ata を「標準」と表示)、ある段階の名称がその魚種の一般的名称となっている場合(例: The general Samoan name for mullet is *anae*. 「ボラを示すサモア語の一般名称は *anae* である。」では *anae* を「標準」と表示)、ある名称が同じ魚種の別のサイズの個体を示す名称の参照先になっている場合(例: *augaloloa*. see *malauli* 「*augaloloa* については *malauli* の項を見よ。」では *malauli* を「標準」と表示)である。一方、成熟度により異なる名称が用いられている場合とは、同じ魚種の異なる名称が用いられる区分が、「若い(young)」と「老いた(old)」、など年齢を表す形容詞で表されている場合(例: called *atuleau* when very young 「とても若い時は *atuleau* と呼ばれる。」)、「稚魚(whitebait/fry)」、「幼魚(juvenile)」、「半成魚(sub-adult)」、「成魚(adult)」のように文字通り成長段階名称で表されている場合(例: *papa tuauli* (juvenile), *papa*(adult) 「幼魚は *papa tuauli*、成魚は *papa*。」)である。
- <sup>3</sup> Kramer(1995)では学名 *Belone ferox* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- <sup>4</sup> この *mu malau* という表記には若干疑わしい点がある。サモア語では、短母音の 1 音節からなる内容語は存在しない。GBIF ではこの魚種のサモア語名称として *mu-malau* が登録されていることから、本来ハイフンがあるべきところを誤植で *mu malau* となった可能性がある。或いは、長母音の 1 音節からなる内容語は存在し得ることから、本来 *mū malau* とすべきところを誤植で長母音のマクロンが落ちてしまっ

た可能性もある。その場合には、別の魚種名称である *mū* (表 9 参照) と重なる分類がなされている可能性を示唆するものとなる。

- 5 Kramer(1995)では学名 *Caranx affinis* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 6 Waas(1984)及び Kramer(1995)では学名 *mulloides* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 7 Waas(1984)では学名 *lisa vaiigiensis* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 8 Kramer(1995)では学名 *mugil troscheli* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 9 Kramer(1995)では学名 *pseudoscarus guacamaia* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 10 Kramer(1995)では学名 *pseudoscarus forskali* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 11 Kramer(1995)では学名 *gobius giuris* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 12 Kramer(1995)では学名 *dules malo* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 13 Kramer(1995)では学名 *theutis* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名で表している。
- 14 Kramer(1995)では学名 *thynnus pelamis* となっていたが、GBIF に従い、より代表的な学名に集約した。
- 15 Kramer(1995)が示した学名 *tetrodon* は GBIF に見当たらない。毒を持つとあるので *tetradontidae* (フグ科) と思われる。因みに、成長段階による区分は示していないが、Waas(1984)では *sue* は *tetradontidae* (フグ科) の名称である。
- 16 ハワイ語とサモア語の子音の規則的音韻対応はおおよそ以下のようになる。(Clark(1979)による。)

サモア語	f	g	l	m	n	p	s	v	‘
ハワイ語	h	n	l	m	n	p	h	w	‘

- 17 ハワイ語にはウツボ科の成長段階名称として、幼魚段階を表す *‘au‘au kī / puakī / ‘ōilo* があるが、表 2 に示したサモア語におけるウツボ科の成長段階名称で対応する形はない。
- 18 ハワイ語にはアジ科の成長段階名称として、幼魚段階を表す *papiopio / pāpio / pau u‘u / pā‘ū‘ū* があるが、表 8 に示したサモア語におけるアジ科の成長段階名称でそれらのいずれかに対応する形はない。
- 19 ハワイ語にはメアジの幼魚および中間段階を指す *pa‘ā‘ā / halalū / hahalalū / halalū / hahalalū / pa‘ā‘ā* があるが、表 8 に示したサモア語におけるメアジの成長段階名称でそれらのいずれかに対応する形はない。
- 20 ハワイ語にはボラの幼魚および中間段階を指す *pua ‘ama‘ama / pua / po‘olā / ‘o‘olā / kahaha / ‘ama‘ama* があるが、表 14 に示したサモア語におけるボラの成長段階名称でそれらのいずれかに対応する形はない。
- 21 ハワイ語でハゼ科の幼魚 *hinana* の成魚段階を指す名称は *‘o‘opu* であり、サモア語で成魚段階を指す *apofu / pa‘ofu* とは対応しない。
- 22 ハワイ語にはシマハギの成長段階名称として、幼魚及び中間段階を指す *‘ōhua-liko / ‘ōhua-kani‘o / ‘ōhua-pala-pohaku / ‘ōhua-ha‘eka‘eka / kakala-manini* があるが、表 22 に示したサモア語におけるシマハギの成長段階名称でそれらのいずれかに対応する形はない。
- 23 塩谷(2017)では大きさが最大のものが成魚段階であると仮定していたため、成魚段階よりも大きな段階というものは設定していなかった。しかしながら、例えば、日本語の出世魚の一つであるボラについても、成魚段階の名称であるボラより、さらに大きく・老いた段階の名称としてトドという名称があるように成

魚よりも更に年齢が進んだ老魚段階を指す名称が存在することがある。それに該当する事例がサモア語では頻繁に見られた。そのような観点から塩谷(2017)を見直したところ、サバヒー科の成魚段階としていた *awa kalamoho* と、フエダイ科の成魚段階としていた *kalekale* はそれぞれ標準サイズの成魚よりも大きな超大型段階と分析すべきであることが分かった。すなわち、サバヒー科の成魚は *awa* であり、それよりも更に大きく老いた段階の名称が *awa kalamoho* であり、また、フエダイ科の成魚段階は *‘ōpakapaka* であり、それよりも更に大きく老いた段階の名称が *kalekale* であると分析するのが適切と思われる。従って、ハワイ語において、標準・成魚段階よりも大きく成長した段階の名称を持つのは2つの科となる。

#### 謝辞

\* 二名の匿名の査読者から貴重なコメントを頂いた、この場を借りて謝意を表したい。

#### 参考文献

- Clark, Ross. (1976) *Aspect of Proto-Polynesian Syntax*. Auckland: Linguistic Society of New Zealand.
- Global Biodiversity Information Facility, Free and open access to biodiversity data. (<https://www.gbif.org> 最終アクセス 2021年12月22日)
- Goldin, Meryl R. (2002) *Field Guide to the Samoan Archipelago*. Honolulu: Bess Press.
- 木村浩之. (2020) 『日本産魚類全種目録』. 鹿児島: 鹿児島大学総合研究博物館.
- Kramer, Augustin. (1995) *The Samoa Islands, vol 2 Material Culture*. Honolulu: University of Hawaii Press. (Translated from the book published in 1903 into English by Theodore Verhaaren).
- Milner, G. B. 1966. *Samoa Dictionary*. London: Oxford University Press.
- 日本魚類学会. (1981) 『日本産魚名大辞典』. 東京: 三省堂.
- POLLEX-Online (<https://pollex.shh.mpg.de/> 最終アクセス 2021年12月24日)
- Pratt, George. (1911) *Pratt's Grammar and Dictionary of the Samoan Language*. Apia: Malua Printing Press. (Reprinted in 1977).
- 塩谷亨. (2017) ハワイ語における魚の成長段階名称について. 『北海道言語文化研究』第15号. 95-107.
- 澁澤敬三. (1992) 「日本魚名の研究」. 『澁澤敬三著作集』第2巻. 9-391. 東京: 平凡社.
- Waas, Richard C. (1984) *An Annotated Checklist of the Fishes of Samoa*, NOAA Technical Report SSRF-781, US Department of Commerce.

#### 執筆者紹介

氏名：塩谷亨

所属：室蘭工業大学ひと文化系領域

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp